

校長室だより
NO. 9
令和元年5月28日

すべては光る

梅園小学校長
たか すりょうへい
高須 亮平

「いじめの気持ち」とは

令和初めての本校の大運動会が、子どもたちの「やればできる力」の発揮により、成功裡に終えることができました。同じ学級の仲間と力を合わせてがんばる姿や、ペア学級の上級生・下級生を一生懸命応援する姿が至る所に見られ、日頃の育ちが、大運動会での具体的な姿として見られ、とても有意義であったと思います。

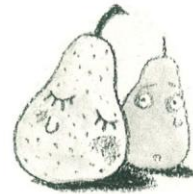
子どもたちは、このような行事や毎日の学習の中で、仲間をつくり、互いに個性や能力をかかわらせながら成長しています。友達とかかわり合うことは、小学校の時期には必要不可欠のことですし、一人一人がよい友達と出会ってほしいと思います。ちょうど新しい学級がスタートして2か月になります。新しいよい友達もできつつあると思います。しかし、この5月下旬から6月にかけては、例年では友達どうしが慣れてくることから、トラブルが発生するときでもあります。

そこで、今回は、子どもの「いじめ」について考えてみたいと思います。まず、『いじめのきもち』（村山士郎編、童心社）という本から、詩をいくつか紹介します。

うれしなき

みたに 三谷 ゆうすけ (小学二年)

二年生の七人が、 まりちゃんをいじめていた。
ぼくは、「まりちゃんかわいそう。」と思いながら、そうじをした。
先生に、ひるやすみに見たことを、 ぜんぶ話した。
先生が、五時間目の前に、 みんなにそのことをはなした。
みんな、ほかあんとしていた。 まりちゃんも、
「あっ、そのこと。気にしてないよ。 あそびだったんだ。」 とわらって言った。
かえり道で、「ゆうすけくんありがとう。」 と言いながら、 まりちゃんはないた。
「これって、本当のうれしなき。」 と言った。
ぼくもつられてないた。 ゆうきをだして言ってよかった。



きたない心

おの ゆきこ 小野 祐希子 (小学六年)

ともだち わるくちを 言っている人がいた。
友達が悪口を 言っている人がいた。
うわっひどいと思って わたしはそれを他の友達に言った。
あれ？ まって？ 同類じゃん！
わたしも悪口を言っていた子も
一番なりたくないと思ったのに 自分はずがうと思ったのに
一番、悪口を言っていた子に近かった。



生きたい 西森 浩美 (中学三年)

死にたいと思っていた この三年間 親同士いろいろあってもめていた

私も友達関係がうまくいかなかった

家でも、学校でも 私の居場所はどこにもなかった

何もかもばからしく 何もかもに失望し だれ一人信じることもできない

みんなが笑っているなか 私は一人冷めていた

笑うこともめんどくさくなっていた

でも今年は…生きたいと思う

死にたいと思っていた時に 「浩美が死んだら悲しいよ」

と、言ってくれた人がいたから すごく…うれしかった…

その日から笑えるようになった 生きることがすごく楽しくなった ありがとう

その人の言葉が 今の私の支えとなった これからの私の支えとなるだろう

だから今日のこの一日も 私は素直に生きたいと思っている



この『いじめのきもち』という本は、小・中学生がいじめについて綴った作品がいくつも載っています。いじめられたときのつらいつらい気持ちを綴った作品、いじめにつながるムカツキや不安感がふくらんでいる心を綴った作品、そして、いじめられている友達に心を動かして、自分のあるべき姿を振り返り綴った作品など、子どもの繊細な心模様を表現したものばかりです。

小学2年の子どもが書いた「うれしなき」からは、いじめられている友達を思いやる気持ちとともに、いじめられている子どもは、人になかなか言い出せず、相談できないつらさのあることが伝わってきます。いじめられていても「気にしてないよ。あそびだったんだ」とつらい気持ちを隠してしまうのです。2年生もまわりを気遣う気持ちが働くのでしょうか。だから、まわりが少しの勇気をもって手を差し延べなければいけないことを教えてくれているようです。

小学6年の子どもが書いた「きたない心」からは、だれもが経験するようなことを飾ることなく、思いをそのまま表現しています。そして、表現することで新たな自分に気付いています。自分が「一番なりたくない」「自分とはちがう」と思っていたものが、実は、自分が一番近い「同類」であったと、ハッと振り返っているのです。いじめの構造とは、この作品のようにならげないところから伝染していくこと、逆にそれに気付く自分でありたいものということを教えてくれているようです。

最後の中学3年の子どもが書いた「生きたい」からは、思うようにいかない連続の中で、多感な中学生の複雑な心模様が伝わってきます。しかし、彼女の失望を救ったのは、その子を思う友達の一言だったのです。その一言がこの上もなくうれしかったのでしょ。彼女の目の前がパッと開けてきたのです。やはり、人とはかかわり合っ生きていくものであることを感じますし、たとえ「死にたい」と思ってもその本当の気持ちは「生きたい」のです。「勉強や運動ができるようになりたい。友達と仲良くしたい」のです。子どもたちはそのきっかけをほしがっているように思えるのです。